
日雇いくんだよ！ 殺人事件

ひやとい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日雇いくんだよ！ 殺人事件

【Nコード】

N9960G

【作者名】

ひゃとい

【あらすじ】

埼玉県のはずれに住む小説好きなだけの日雇い派遣の中年男がある日、小説のネタ探しに散歩に出かけ、いろいろあつて帰ると、家の前になんと若者の死体が！流されるまま事件に巻き込まれていく日雇いくん、さてこれからどうなるのか！

1 し、死んでるよお！（前書き）

いわゆるウツカリチャツカリしているものなので、

事件は一向に展開していきませんが、

無駄なものを読まされたと思ったり

怒ったりしないようなるべくお願いいたしますです。

1 し、死んでるよお！

埼玉県のはずれに、日雇いくんという貧乏でムサイ白髪混じりの中年男がおりました。

仕事の嫌いな日雇いくんは小説を書くのが唯一の生きがいなのですが、書いたものは誰からも面白いといわれた事がありませんでした。

ついこの間もネット上にある投稿サイトに小説をアップしたところ、

「詩ね」

「ざけんなゴルア」

「小説舐めとんかこのDQN」

「また駄作書きかよ」

「逝ってよし」

などと古めかしい言葉で叩かれてしまいました。

「よおし、今度は面白いつていわせてやるぞお！」

そう思った日雇いくんは、早速外に出て、何か面白い事がないかと散歩に出かけました。

しかし、そうそう小説のネタになるような事など見つかるわけもありません。

「あー何かないかなあ」

仕事にも行かず本も読まない日雇いくんが思いつくものといったら、自動販売機のつり銭口にお金が残ってないかだとか、近所の豆腐屋はカウンターにいつも人がいないから店先に出ている納豆でもパクっちゃおうかとか、とにかくロクでもない事ばかりで、面白そうなお小説のアイデアなどちっとも出てきません。

「あーいつまで経っても思いつかないから家帰ろーっと」

散歩してからまだ30分もしないうちにそうぼやくと、日雇いく

んは家に帰ろうとして来た道をひき返す事にしました。

「あれー、ここってどこだったっけ？」

なんと、日雇いくんは近所だというのにもかかわらず、道に迷ってしまったのです。

まわりは田んぼばかりで、何か目印になるようなものもありません。

「ワーン！ どーしょー！ このままじゃお家に帰れないよー！
パパー！ ママー！」

ぐずり出した日雇いくんはそのまま道に倒れ、

「ワーヤダヤダー！ コーラ飲みたいよー！ ポテチ食みたいよー！
池袋のふくろで安焼酎が入ったホッピー飲みたいよー！ ついでにスライストマトもー！」

などと言って駄々をこねながらあちこちに転がりはじめました。日雇いくんのまわりが土埃でもうもうとなります。

1時間ほどして誰も助けに来てくれないのを察した日雇いくんは、仕方なく立ち上がると、

「ま、いいや。道はどっかに繋がっているんだから、歩いたらそのうちわかるだろう！」

などと叫ぶと、服についた土汚れもそのままに、先ほどとは打って変わったような陽気さで歩き出しました。

白髪交じりの中年男が駄々をこねながら暴れている様子を見て助けてくれるような人なんてめったにいないだろう、という事さえわからない日雇いくんは、暢気に口笛など吹きながらそのまま歩きま

す。
「くっちぶーえぶーいーてーヒュヒュヒュヒュッヒューああきちへー
いーいったー」

そのうち歌まで唄い出しました。

いいトシして土埃だらけの服を着て脳天気になHK教育でやってきた道徳番組の歌など唄いながら歩いているのはおそらく彼だけでしょうね。

2 おまわりさんと日雇いくん(前書き)

ちゃんとした展開はまだまだ先です。

2 おまわりさんと日雇いくん

日雇いくんはあわてふためきながらも、さっそく家から一番近い駅の前の交番に駆け込もうと、早速走りだしました。

「おおおおおおおまーりさあああん、ひ、ひ、ひとがあ、ひとがー」

しかし、足がどういいうわけか思うように進みません。

急ごうとすればするほど足がもつれ、転びそうになったりしました。

「なんだよー、こんなときにー」

実は日雇いくん、先ほどの迷子で足がすっかり疲れていたのです。

なので、なかなか足が言う事を聞いてくれません。

「だ、だめだー、足上がらないよー。うわー」

ちっとも前に進まないのに声ばかりが大きかったので、とても近所迷惑です。

それでも日雇いくんは、交番が見える道までなんとか辿りつきました。

「もうすぐう、もうすぐだあー」

日雇いくんはさらに急ごうとしました。

すると、自転車が1台、日雇いくんの方へ向かってきました。

けっこうなスピードでやってきます。

「な、なんだよう、こわいなあ」

日雇いくんはすばやく避けようと思いました。

しかし足がふらついて避けきれず、そのまま自転車と体当たりしてしまいました。

「う、うわああああああ」

どんがらがつしゃんがががーんん!!

日雇いくんと自転車はそのまま倒れてしまいました。

「あ、危ないじゃないかよお!」

頭から軽く血を出しながら、日雇いくんは寝転がったまま自転車の主に毒づきました。

「す、すまん、あつたたたた……」

なんと、自転車の主は、日雇いくんが捜し求めていた、そのおまわりさん、だったのです。

「道交法を守らなきゃならないおまわりさんが、スピードなんか出しちゃダメじゃないですかあ!」

たいした学歴もないのに、日雇いくんは難しいことを言ったようなつもりになってツッコミを入れました。

なんとなく得意気です。

おまわりさんも倒れた状態のまま言いました。

「あたたたた、いや実は急ぎの件があつたもので……」

「えっ、すると何か事件でも?」

日雇いくんは自分が走り出した理由などすっかり忘れて、おまわりさんに尋ねました。

「いやー、同僚から電話で『パチンコで十箱積んだから見に来てくれ』って来たもんだからつい急いでしまったんだ……」

「なんすかそれー。おかげでワタシ怪我しちゃったじゃないですかあ。どうしてくれるんですかあ」

「まままま、どうか一つこれで……」

日雇いくんの剣幕にあわてたおまわりさんは、制服の内ポケットから大きいだけの薄汚い財布を取り出すと、3千円を日雇いくんに渡そうとしました。

「なんすかこれー。ワタシ頭から血が出てるんですよ。もっと治療費かかるに決まってるじゃないですかあ。」

「まま、じゃあもう少しこれで……」

さらにあわてたおまわりさん、今度はもう二千円を足して日雇い

2 おまわりさんと日雇いくん（後書き）

こんな調子のが次回も続きます。

3 再びおまわりさんと日雇いくん(前書き)

話はいかわらず横道にそねていきます。

3 再びおまわりさんと日雇いくん

日雇いくんはあわてふためきながらも、さっそく家から一番近い駅の前の交番に駆け込もうと、早速走りだしました。

「おおおおおおおまーりさあああん、ひ、ひ、ひとがあ、ひとがー」

しかし、足がどういいうわけか思うように進みません。

急ごうとすればするほど足がもつれ、転びそうになったりしました。

「なんだよー、こんなときにー」

実は日雇いくん、先ほどの居酒屋でビールを飲んだので酔いが全身にまわってしまい、足がふらついてしまっていたのでした。

なので、なかなか足が言う事を聞いてくれません。

「だ、だめだー、足上がらないよー。うわー」

ちつとも前に進まないのに声ばかりが大きかったので、もう夜中だというのにとて近所迷惑です。

それでも日雇いくんは、交番が見える道までなんとか辿りつきました。

「もうすぐう、もうすぐだあー」

日雇いくんはさらに急ごうとしました。

そこへ一人の、頭が中途半端に禿げている猫背の、いかにも風采が上がらないといった感じの中年男が声を掛けてきました。

「おつ、日雇いじゃない。どこへ行くんだ？」

実は彼、日雇いくんの数少ない友達で、名前をフタさんといいます。

「あーフタさん、ひ、ひとがワタシの家の前で倒れているんですよ。

」

「な、なんだってー！」

「だからこれから交番へ行っておまわりさんに教ええないといけないんですよー」

「そ、そうかあ！　じゃあオレも一緒に行くよ！」

意気投合した二人は、早速交番へ向かいました。

しかしどうした事か、二人ともなかなか前に進みません。

「フタさん、ワタシ酔っ払っちゃっててなかなか交番に着かないですよー。先に行ってくださいーい」

「日雇いー、お、オレも昨日から何にも食ってなくて力が出ないんだよー」

実はフタさん、腎臓を悪くして生活保護を受けているのですが、三度のご飯よりスナック通いが大好きで、保護費が給付されるとすぐに行き付けのスナックに行ってお金を使ってしまつのです。

ある月など、ツケ飲みが過ぎて、保護費の大半をその返済に宛ててしまうような事もあったりしました。

そんなわけで食べるのにも困ってしまったフタさんは、日雇いくんにお金を借りようと、駅前を練り歩いてたのでした。

「えー、またあそこ行つたのー」

「行っちゃつたよー」

「だからお金がなくなる前にロチャースで食べ物まとめて買ってあげばって言つたのになー」

「つ、つい抑えが効かなくてさーえへあはひふおふえ」

日雇いくんの数少ない友達といえば、たいがいがこんな調子だったので、日雇いくんもそれ以上追求するのはやめる事にしました。

「はあはあ、でもなんとか来たぞお」

二人は苦勞の末、ようやく交番に辿りつく事が出来ました。

交番のアルミドアをガラツと開けると、日雇いくんは叫びました。

「お、おまわりさん！　ひ、人がワタシの家の前で倒れているん

ですー!!」

しかし、交番には誰もいませんでした。

「あれー、まだパチンコ屋に行っているのかなあ」

日雇いくんがそうつぶやくと、フタさんが言いました。

「あれ、日雇い、なんでそんな事知ってるの？」

日雇いくんは思わず先ほどのおまわりさんとのやり取りを話そうとしましたが、お金をもらった事がフタさんにわかってしまうと思うと、とてもそんな事は言えませんでした。言えばお金をたくさん貸してくれると言われるに決まっているからです。

「あ、あー、ここのおまわりさんパチンコが好きみたいだからさー、そうなんじゃないかなあと思ってさー」

日雇いくんは内心の焦りを必死に隠しながら言いました。

「そーなん？ ふーん？」

不審そうな表情でフタさんが呟きますが、日雇いくんはスルーの方向で全ツツパしまります。

そんな会話をしているうち、外から自転車のブレーキ音が聞こえてきました。

「あつ、おまわりさーん!!」

日雇いくんが叫びながら振りかえると、目の前にあの、お金を脅し取った、もといもらった、おまわりさんがいたのでした……。

3 再びおまわりさんと日雇いくん（後書き）

そろそろ本筋にいきそうになりますが……。

4 三度日雇いくんとおまわりさん (前書き)

あいかわら二人がずウツカリチャツカリしてます。

4 三度日雇いくんとおまわりさん

4 三度日雇いくんとおまわりさん

さっきの表情とは一転して、どういわけか明るい表情のおまわりさんは、日雇いくんにお金をとられた事などすっかり忘れたように言いました。

「やあ！ さっきはごめんね。どうしたんだい？」

「ひ、ひとが私の家の前で倒れているんですー！！！」

「な、なんだって！ じゃあさっそく、きみの家まで案内してくれー！！！」

「は、はい！ お願いします！」

日雇いくんはおまわりさんと一緒に家へ向かう事になりました。

「本来はいけない事なんだが、急を要するので自転車の後ろに乗ってくれ！」

「わかりました！ じゃあフタさんはあとで家に来てね！」

「ああわかったよ。また後でな」

日雇いくんとおまわりさんは自転車で家へ向かいました。

後に残されたフタさんがつぶやきます。

「さっきはごめんって、いったいなんだったんだろっ……」

何事もなく、日雇いくんとおまわりさんは家に着きました。

自転車に乗っている間ずっとおまわりさんにつかまっていた日雇いくんは、太り気味のおまわりさんの腋臭がきつかったので少しトリップしていましたが、ふらふらしながらも発見当時の様子を、なんとかおまわりさんに語ります。

「……というわけで、びっくりして交番に来たわけなんです！」

おまわりさんは無線でどこかに連絡を取りつつ、倒れている若者

の検分をします。

「うーん、こりゃたぶん死んでるな。今、署に連絡したからじきに来ると思う」

「あ、ありがとうございます」

日雇いくんとおまわりさんは管轄署の人たちが来るのを待つ事にしました。

日雇いくんはただ待っているのも面白くないと思い、日雇いくんにお金を取られてしょんぼりしていたおまわりさんが、さっき見たときには急に明るい顔つきになっていた理由を聞いてみる事にしました。

「ところでおまわりさん、何かいい事でもあつたんですか？」

「な、なんでわかるんだい？」

「だって、さっきものすごく明るい顔してましたよ」

「やっぱりわかるかな。この場で言うのは不謹慎なんだけど、実はパチンコで……」

「まさか勤務中に、パチンコを？」

「いやまさか。パチンコで十箱積んだ同僚が、勝ったからというんで今度飲みに行こうって言うてくれたんだよ」

「それはよかったですね」

「きみも、もしよかつたら来るかい？ なかなか一緒に行ってくれる仲間がいなくてねえ」

「えっ、いいんですか？」

「ああいいとも。じゃあ今度”青汁にサイダーを入れかき混ぜたものにパラペーニヨをちよいと足して仕上げにいなごを細かく砕いたものをふりかけたタマゴセーキを飲むツアー”に招待するよ。まだ私とその同僚しか仲間がいらないんだ」

日雇いくんの顔がみるみるうちに青黒くなってしまったのは、もちろん言うまでもありません。

しばらくして、管轄署の人たちがやってきました。

たちまち辺りがビニールシートやらなにやらでいっぱいになります。

現場検証のはじまりです。

日雇いくんはぼーっとその様子を見ていただけでしたが、そんな彼に、やがて一人の男が声を掛けました。

「きみが第一発見者の日雇いくんだね」

「は、はい」

「私は県警捜査一課の藻野藻薄警部だ。先に彼にも話したと思うが、私にもさっそく発見当時の様子を話してくれないかな」

藻薄警部は、普段ドラマなんかで出てくるようなよれよれの服などは着てはいませんでしたが、総白髪に渋面で、定年近い年齢のように見えました。妙に威厳があります。

日雇いくんはその威厳に圧倒されながらも、さっきのおまわりさんに言ったのと同じ事を話しました。

「……ふむ、そうか」

「やっぱり、この人は……」

「そう、死んでいる」

日雇いくんは、殺人事件に初めて関わったので、なんだかドキドキしています。

4 三度日雇いくんとおまわりさん (後書き)

ここでようやくミステリになりそうではあるんですが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9960g/>

日雇いくんだよ！ 殺人事件

2010年10月14日13時20分発行